〔古事記傳二十四〕御母は美淤毛と訓べし、乳母を云なり、淤毛と云は、兒を養育す事をする婦人を凡て云稱なり、其中に乳母は、殊に主とある者なる故に、唯に淤毛とのみ云なり、又親母も主と養育す者なる故に淤毛とも云り、親母を淤毛と云は、養育す方に就て云稱なり、たゞ親母の古名と心得るは精しからず、親母を淤毛と云るは、書紀仁賢卷に、於母亦兄、此云於菟母尼菟是、万葉廿に、父母を意毛知々とよめり、同卷に、阿母刀自とよめるも、防人の歌にて、東言に淤を阿と云るなり、曾禰好忠集に、おもとじの乳ぶさのむくい云々、書紀神武卷に、孔舍衞之戰、有人隱於大樹而得免難、仍指其樹曰、恩如母、時人因號其地曰母木邑、今云飫悶酒奇訛也、新井氏東雅に、百濟の方言に母をおもと云り、今も朝鮮の俗、母をおもと云は、古の遺言なり、これ吾國の言の彼國に傳はりしか、又彼國の言の吾國に傳はりしか、未詳と云り、今思ふに、此稱神武の御世の故事あり、又古く乳母にも云れば、本より皇國言なるが韓地へも傳はれるなるべし、さて親母を淤毛と云て母字を然訓故に、乳母の淤毛にも、やがて其母字のみを書は、古字には拘らざりしゑわざなり、乳母をたゞ淤毛と云る例は、万葉十二十に、緣兒之爲社乳母者、求云、乳飲哉君之、於毛求覽、是は乳母と書たれども、必たゞかもと訓べきこと、末句に於毛とあるにて知べし、今本の訓はいたく誤れり、悔毛、老爾來鴨、我背子之求流乳母爾、行益物乎と見え、孝謙天皇の御乳母、山田宿禰比賣島といふ人を、續紀廿二十四丁万葉廿十三丁に、山田御母とあり、和名抄に乳母、日本紀師說、女乃於止、言妻妹也、事見彼書、唐式云、乳母、和名米乃止、辨色立成云、嬭母、今按卽乳母也、和名知於毛とあり、古本には知於毛の知字なし

〔日本書紀十五顯宗〕元年二月、是月召聚耆宿、天皇親歷問、〇中略於是天皇與皇太子億計、將老嫗婦、幸于近江國來田綿蚊屋野中、堀出而見、果如婦語、臨穴哀號、言深更慟、自古以來、莫如斯酷、仲子之尸、交橫御骨、莫能別者、爰有磐坂皇子之乳母、奏曰、仲子者上齒墮落、以斯可別、於是雖由乳母相別髑髏、而竟難別四支諸骨、由是仍於蚊屋野中造起雙陵、相似如一、葬儀無異、〇下略

〔續日本紀十七聖武〕天平勝寶元年七月乙未、從六位上阿部朝臣石井、正六位上山田史日女島、正六位下竹首乙女、並授從五位下、並天皇之乳母也、

〔續日本紀二十四淳仁〕天平寶字七年十月乙亥、於是史生已上皆停其行、以修理船、使鎌束便爲船師、送新福等發遣、事畢、歸日我學生高内弓其妻高氏及男廣成緣兒一人乳母一人、幷入唐學問僧戒融、優婆